

仏・菩薩や高德の聖者などが衆生を救うために、仮に姿をとってこの世に出現すること。わが国の神仏習合思想においてもっともよく現れているもので、本地である十一面観音が鹿島大明神に垂迹したことや、阿弥陀仏が熊野権現の証誠殿に垂迹したとするのはその一例」と記載されている。

『法華経』では、「本来ある世界、即ち真如法性界を（ほんじしんじんにほつしょうか）を（ほんじ）へ本地（ほんじ）へ（形と色をはるかに超えたもの）」と呼び、このへ本地へに依って形と色あるものに生み出された現象界をへ垂迹へと称している。『菅家文章』「450 和由律師獻桃源仙杖之歌」に「主人垂迹相携去、願我生々每處尋」の句が見える。このように、仏教語での「垂迹」は、仏が衆生を救うために生まれ変わって、仮にこの世に出現することを指す。

また、もう一義の「迹を垂れる」の意を考察してみる。

「垂」は、「残す、目下または後世の者に伝える」、「迹」は、「あゆみ・行い・行為・功績、また、ほまれ・名声」の意。『漢辞海』に「垂れる」の一例として、「垂名乎後世」（『荀子』「王霸」）の一文を載せる。

「迹」の一例として、『菅家文章』「223 読書」に「有迹崇尼父」の句が見える。

九十七句の「垂迹」の場合、「功績・名声を後世に伝える」の意が適っているように思われる。ここでは、「老子が説いた無為自然の教え」を指すと考えた。

補説②

○97句目の「話」と「淡」について

97句目▼老君垂迹話（●○○●●）

尊経閣本（岩波古典文学大系本）